ン大学（ニュー・ブランズウイック州）のロス教授（地理学）が代わって講義することになっている。これらの講座以外にも、京都大学ではブリティッシュ・コロンビア大学のホルスティ教授（国際関係）が、同志社大学ではヨーク大学のフセ教授（社会学）が講義しているほか、いくつかの大学でもカナダに関する講座がとり入れられている。

このほか、カナダ政府は、国立国会図書館や前記の筑波、慶応、国際キリスト教各大学、それに東京、京都両大学をはじめ、多くの大学、それに各都市の図書館などに、毎年多数のカナダの図書を寄贈して、研究者や市民によるカナダ研究に資している。駐日カナダ大使館の図書館には約三千冊のカナダ関係の図書とフイルムが揃えてあり、利用者も着実にふえていて、カナダへの関心の高さを示している。

一方日本からは、国際交流基金より、七四年度には東邦学院の中村元院長（東洋思想）がブリティッシュ・コロンビア大学とビクトリア大学に、七五年度は上智大学の鶴見和子教授（国際関係論）がトロント及び周辺の大学へ、七六年度には文芸評論家の村松剛氏がカナダで講演旅行をしている。

人的交流

スポーツの分野では、一九三〇年、ラグビーの全日本選抜軍がバンクーバーを中心としたブリティッシュ・コロンビア州に遠征し、スポーツ交流の先鞭をつけた。その後、戦争により、交流はなかったものの、一九五九年のバンクーバー・チームの来日、翌一九六〇年の八幡製鉄チームの訪加、六一年のカナダ・キャッツチームの来日、六三年の全日本選抜軍の遠征と交流が復活した。以後しばらく交流は途絶えたが、一九七〇年のブリティッシュ・コロンビア選抜軍の訪日、翌七一年の全日本高校選抜チームのカナダ遠征、さらに昨年には春の全日本選抜軍の訪加、秋にはブリティッシュ・コロンビア大学チームの来日と交流が盛んになっており、お互いに実力伯仲のよき練習相手として考えている。またクラブ・チームとしては、四十才以上のラガーによる不惑チームの交流がここ二、三年毎年のように交互に行なわれ、日加ラグビー交流の歴史の古いことを示している。一昨年は国鉄チームがカナダに遠征し、それを縁に今年はバンクーバーからスクライブ・チームが訪日した。

アイスホッケーの交流試合

カナダの国技といわれるアイスホッケーでは、一九五四年にケノラシスルスというチームが日本で本場のプレーを披露し、日加アイスホッケー親善のきっかけとなった。その後一九六〇年には日本のオリンピック・チームがスクオウ・バレーでのオリンピック参加の途次カナダで強化合宿・練習試合を行ない、以後も六九年の西武鉄道チームの遠征や、カナダからのコーチ、プレヤーの招聘、あるいは日本選手のアイスホッケー留学と、日本のアイスホッケー興隆のため極めて密接な関係が続いている。交流試合も、七四年のブリティッシュ・コロンビア大学チームの来日、七六年のサンダーベル・ツインチームやトロント大学チームの来日、そして今年の二月の世界選手権への強化をかねての全日本選抜軍のカナダ遠征と、最近では殆ど恒例のようになっている。

そのほかのスポーツの分野でも、カナダは昨年のモントリオール・オリンピックの開催国として、各参加競技種目中、日本の得意とするバレーボール、柔道、体操などの種目に、選手団強化のため日本からコーチや選手を招聘したり、カナダ選手団を派遣したりして、盛んに交流が行なわれた。カナダ側は、こうした関係を今後も持続、さらには強化することを強く望んでいる。

商用や観光などで両国間を往来する人の数も急速にふえた。一九七四年にカナダを訪れた日本人は七万七千五百四十三人。それが昨年は十万六千七百余人（前年比一八・一パーセント増）に達した。また、日本を訪問したカナダ人も、七四年の一万九千七百六十五人から昨年は二万九千三百三十一人（前年比二四・五パーセント増）にのびている。さらに、日加間の姉妹都市提携も盛んで、一九六二年にブリティッシュ・コロンビア州ニュー・ウエストミンスター市と大阪府守口市が姉妹都市になって以来、以下の十一組の縁組みが実現し、学生や市当局者、一般市民の交流増進に大きく寄与している。

ニュー・ウエストミンスター＝守口
バンクーバー＝横浜
バーナビー（B・C州）＝釧路
プリンス・ルパート（B・C州）＝尾鷲
ダンダス（オンタリオ）＝加賀
ノース・バンクーバー＝千葉
ウィニペグ＝東京都世田谷区
リンゼー（オンタリオ）＝名寄
ジアスパー＝箱根
リッチモンド（B・C州）＝和歌山
ハミルトン（オンタリオ）＝福山

◇　◇　◇

昨年秋、トルドー首相が日本を公式訪問した際、日加文化協定が調印された。これにより、近年、主として経済的な要因で著るしい進展をみせた日加友好関係を、相互の文化の理解によって「日加関係の基盤を一層幅広く、かつ深みのあるもの」にするため、芸術、教育、学術、科学、その他の諸分野でますます交流を深めていくことになった。すでに「カナダ経済入門」などの翻訳・刊行、日本におけるカナダ研究への援助、スポーツ交流など、協定の効果は現われている。今後は、この協定を跳躍台として、両国間でいろいろな文化交流計画が立案・実施され、総合的な日加関係の進展、緊密化に資することが期待される。国家間の友好関係は、何よりも国民レベルでの相互理解が基礎になるからである。